

幼児同士の相互作用場面における位置関係の特徴

— 幼児の気質を踏まえた検討 —

神田まほろ [鹿児島県立鹿児島養護学校]

島 義弘 [鹿児島大学教育学系(教育心理学)]

An observational study of position preference in preschool children's interactions with peers: An investigation based on children's temperaments

KANDA Mahoro and SHIMA Yoshihiro

キーワード：幼児、位置関係、気質、相互作用

目的

幼児期は、3歳後半には遊び相手が特定のになり、その関係はある程度持続的なものとなる(Hinde, Titmus, Easton, & Tamplin, 1985)。また、3歳後半から4歳までに特定の他者を十分に意識した仲間関係が形成されると考えられている(Hartup, 1992)。幼稚園(保育園、認定こども園を含む)は、子どもにとって同年齢の他者と生活を共にする初めての環境であり、集団の中で本格的な仲間関係を形成していく(Ellis, Rogoff, & Cromer, 1981)。その中で、幼児同士が相互作用する際にどのような位置関係を取るのかについて検討がなされている(Cook, 1970; 神田・島, 2019; 外山, 1998)。

例えば、外山(1998)は保育園での食事場面において2歳児、4歳児ともにタテの位置関係(対面あるいは斜めになる位置関係)よりもヨコの位置関係(隣り合わせあるいは直角に並ぶ位置関係)を好むことを示している。また、神田・島(2019)はクラスでの活動場面では3、4、5歳児ともヨコの位置関係を重視すること、自由遊び場面においてもヨコの位置関係を取ることが多いが、年齢とともにタテの位置関係や円の位置関係(3人以上で構成される、タテとヨコの両者を含む位置関係)も増加する傾向にあることを報告している。また、幼児同士の位置関係は遊びのタイプ(並行遊び、連合遊び、協同遊び)によっても異なることも示されている(神田・島, 2019)。これらのことから、幼児同士の位置関係は、基本的にはヨコの位置関係が選好されること、発達とともにタテの位置関係や円の位置関係も取られるようになっていくこと等が明らかになっており、位置関係の変化が認知発達(Piaget, 1923 大伴訳 1954)や社会性の発達の指標となり得ることが示唆されている。

ところで、人の行動は個人のパーソナリティ特性や状況のみで決定されるものではなく、パーソナリティ特性と状況の相互作用によって生起するものである(若林, 1993)。そのため、相互作用場面における位置関係を検討するにあたっては、観察対象となる幼児のパーソナリティ特性等、個人差変数も考慮する必要があるが、こういった視点で検討した研究は見当たらない。そこで、本研究

では幼児同士の相互作用場面における位置関係について、幼児の個人差変数としての気質を加味して検討する。

方法

行動観察

観察対象者 A 幼稚園の年少児，年中児，年長児の各クラスから，以下の条件に適合する幼児 9 名（3 条件×3 学年）を担任教師に選出してもらった¹。選出の条件は「常に友達が周りにいる子ども」，「1 人行動を好み，単独行動が多い子ども」，「輪に入りたいけど中には入れない，もしくは，入り方がわからない子ども」であった。

観察時期 201x 年 7 月上旬から中旬までの 5 日間，登園から降園までの時間を通して観察を行った。

観察手続き 個体追跡法により，9 名の観察対象者の行動をビデオ撮影した。各観察対象者の撮影時間は約 3 時間から 4 時間であった。なお，撮影にあたっては対象児を追って撮影をする追跡カメラに加えて各クラスの保育室とプレイルームに 1 台ずつ定点カメラを設置した。以下の分析は，基本的には追跡カメラの映像を基にしているが，必要に応じて定点カメラの映像によって補完している。

なお，幼稚園での活動には自由遊びの時間と給食（お弁当）や帰りの会等，クラスで集まって活動する時間があつた。

質問紙調査

幼児の気質を測定するために，A 幼稚園に通う幼児の保護者と各クラスの担任教師を対象に質問紙調査を行った。

質問紙 武井・寺崎・門田（2007）の簡易版幼児気質質問紙（18 項目）を使用した。この質問紙は幼児の普段の様子に基づいて回答するものであり，否定的感情反応，神経質，順応性の低さ，外向性，規則性，注意の転導性の 6 因子で構成されている。「全くない=1」から「いつもある=4」までの 4 件法で回答を求めた。

回答者 A 幼稚園に在籍しているすべての幼児の保護者 85 名に，自身の子ども（きょうだいで在籍している場合は年長の子ども）の気質について回答を求めた。85 名のうち回答に不備のない 81 名を分析対象とした。

また，観察対象者についてはそれぞれのクラスの担任教師にも，対象者の気質について回答を求めた。

結果と考察

A 幼稚園の気質的特徴

A 幼稚園に在籍する幼児全体の気質的特徴を把握するために，武井他（2007）が報告している簡

¹ A 幼稚園は各学年 1 クラスであった。

Table 1. A幼稚園と簡易版幼児気質質問紙作成時のデータ(武井他, 2007)の比較

	A幼稚園 (N = 81)		武井他(2007) (N = 1349)		t値 (df = 1428)
	M	SD	M	SD	
否定的感情反応	2.31	0.56	2.40	0.59	-1.34
神経質	2.67	0.47	2.19	0.56	7.55 ***
順応性の低さ	2.16	0.57	2.45	0.73	-4.34 ***
外向性	3.01	0.51	3.41	0.47	-7.40 ***
規則性	3.07	0.46	3.16	0.59	-1.67
注意の転導性	2.69	0.45	3.37	0.43	-13.78 ***

 $p < .001$

簡易版幼児気質質問紙作成時のデータと比較対照した (Table 1)。

A 幼稚園の在籍園児のデータと簡易版幼児気質質問紙作成時のデータ (武井他, 2007) を用いて t 検定を行ったところ, A 幼稚園の在籍園児は質問紙作成時のサンプルに比べて神経質が高く, 順応性の低さ, 外向性, 注意の転導性が低かった ($|t|(1428) \geq 4.34, ps < .001$)。

この結果について, 主として自由保育を行っていること, 転出入が少なく, 兄弟・姉妹での入園が多いため学年問わず顔なじみの園児が多いこと等の A 幼稚園独自の特徴が, 大規模サンプルとは異なる A 幼稚園の幼児の気質, あるいは気質を反映した行動パターンに影響を与えている可能性が考えられるが, 本研究ではその背景を詳らかにすることはできない。以降は, 全体としてはこのような気質の特徴を持った子どもたちの中での比較であることを念頭に置きながら分析・考察を進めていく。

観察対象者の位置関係の特徴：保護者評定との対照

続いて, 観察対象者の行動特徴と気質的特徴の関連を検討した。気質的特徴については, 観察対象者の評定値 (保護者回答) と各学年の平均値 (保護者回答) を比較した。

年少児 (Table 2) B 児 (男児, 撮影時間 3 時間 32 分) は神経質が低く, 規則性が高かった ($|t|(18) \geq 2.65, ps < .05$)。行動観察においては目についた人にちょっかいを出していることが多く, 特定の誰かと遊ぶという様子は見られなかった。気になる遊びをしている人のヨコから関わったり, 目の前のタテの位置関係から遊びを発展させたりしていた。特定の位置関係に対するこだわりは見られず, クラスでの活動場面でも空いているところに入っていき姿は, 神経質傾向の低さと合致する。また, 他児がしている遊びに入るときは, 追いかけるなど, その遊びとは直接関連しない行動を通して参入することが多かった。

C 児 (男児, 撮影時間 3 時間 20 分) は外向性が高く, 順応性の低さと規則性が低かった ($|t|(18) \geq 4.30, ps < .001$)。このような気質的特徴からは, 社会的で環境への適応力が高い人物であると考えられるが, 観察においては他児と遊ぶことはあまりなく, 先生と, もしくは 1 人で遊んでいる姿が多く観察された。なお, 食事場面においては先に座っている子どものヨコに席を決める姿が観察

Table 2. 年少児クラスと観察対象者の評定値と*t*値 (*df* = 18)

	年少児クラス		B児		C児		D児	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	評定値	<i>t</i> 値	評定値	<i>t</i> 値	評定値	<i>t</i> 値
否定的感情反応	2.56	0.51	2.67	0.91	2.67	0.91	2.33	-1.93
神経質	2.61	0.41	2.33	-2.95 **	2.67	0.58	2.33	-2.95 **
順応性の低さ	2.32	0.58	2.33	0.10	1.67	-4.75 ***	2.33	0.10
外向性	3.18	0.49	3.00	-1.53	3.67	4.30 ***	3.33	1.34
規則性	3.09	0.39	3.33	2.65 *	2.67	-4.57 ***	3.00	-0.96
注意の転導性	2.84	0.38	2.67	-1.92	2.67	-1.92	2.00	-9.40 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

された。3歳児は幼児同士よりも大人との関わりが多い時期である（近藤，2017）。発達とともに幼児同士の相互作用が増えていくにつれて，上記の気質的特徴が位置関係にどのような影響を与えるのか，引き続き検討する必要がある。

D児（女児，撮影時間3時間13分）は神経質と注意の転導性が低かった ($|t| (18) \geq 2.95, ps < .01$)。観察においては1人で製作遊びをしている時間が長く，遊びに誘われても「これが終わったら」と答えるなど，自身の遊びに集中している様子が見られた。位置関係については，ヨコの位置関係で遊ぶことが多いが，同じものを作るときはタテの位置関係を取るなど，状況に応じて位置関係を変化させていた。これらの行動は，神経質ではなく集中力が高いというD児の気質的特徴と一致している。

年中児（Table 3） E児（女児，撮影時間3時間31分）は順応性の低さが高く，否定的感情反応，神経質，外向性，注意の転導性が低かった ($|t| (30) \geq 2.17, ps < .05$)。E児には仲の良い友達があり，食事場面では友達とヨコの位置関係で着席していた。また，自由遊び場面でも他児に手を引かれながらヨコの位置関係で遊んでいる様子が多く観察された。気質的には積極的ではないが，周囲に合わせて行動することができる子どもであると推定され，他児に誘われて遊びを開始する様子はE児の気質的特徴に合致したものであると考えられる。一方で，ヨコの位置関係を強く選好する傾向も認められたが，これは神経質傾向が低いという気質的特徴と矛盾する。位置関係の選好は気質的特徴よりも年齢（発達段階）の影響をより強く受ける可能性も考えられ，E児の位置関係の

Table 3. 年中児クラスと観察対象者の評定値と*t*値 (*df* = 30)

	年中児クラス		E児		F児		G児	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	評定値	<i>t</i> 値	評定値	<i>t</i> 値	評定値	<i>t</i> 値
否定的感情反応	2.26	0.51	2.00	-2.76 *	2.67	4.40 ***	2.67	4.40 ***
神経質	2.72	0.53	1.33	-14.39 ***	3.00	2.89 **	1.67	-10.87 ***
順応性の低さ	2.10	0.59	2.33	2.17 *	2.00	-0.9	1.67	-3.98 ***
外向性	2.88	0.44	2.00	-11.07 ***	3.00	1.49	3.67	9.90 ***
規則性	3.03	0.48	3.00	-0.37	3.67	7.25 ***	3.33	3.39 **
注意の転導性	2.68	0.48	2.33	-3.94 ***	2.67	-0.08	3.33	7.41 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

選好を引き起こす、気質以外の要因を探る必要がある。

F児（女児，撮影時間3時間18分）は否定的感情反応，神経質，規則性が高かった（ $|t|(30) \geq 2.89$, $ps < .01$ ）。手をつないだり，他児の手を引きながら移動したりする様子がクラスでの活動場面，自由遊び場面を通して見られるなど，ヨコの位置関係に対する強い選好が見られた。また，物理的距離が近いことも特徴的であった。ヨコの位置関係に対する強い選好はF児の気質的特徴（神経質傾向の高さ）と合致するが，E児の結果と合わせて考えると，これは気質的特徴ではなく4歳という発達段階を反映したものであるとも考えられる。

G児（男児，撮影時間4時間31分）は神経質と順応性の低さが低く，他の4つは高かった（ $|t|(30) \geq 3.39$, $ps < .01$ ）。着席位置を決めるときはヨコの位置関係を選択していたが，自由遊び場面では活動内容に応じてタテ，ヨコ，円の位置関係のいずれも観察された。特に，他児と同じ対象を見るときはタテの位置関係を選好していた。年中児はヨコの位置関係を選好する様子が観察されたが，外向性や順応性が高く，神経質ではないこと等のG児気質的特徴がより多くの子どもたちとの関わりを生じさせ，その中で必然的にタテや円の位置関係も生起させていたものと考えられる。また，G児には年長児のクラスに頻繁に行く様子も観察された。より年長の子どもと多く関わるのが，タテや円の位置関係での相互作用を促進したのかもしれない。

年長児（Table 4） H児（男児，撮影時間3時間59分）は神経質，順応性の低さ，規則性が低かった（ $|t|(30) \geq 4.19$, $ps < .001$ ）。観察においては，他児と2人で同じ遊びをするときや同じものに注意を向けるときは，対象物を挟んでタテの位置関係を取る様子が見られた。また，2人以上で行われている遊びに参入する場合は，空いているところに入ったり，2人の正面にいたりして円の位置関係を作る様子が見られた。H児の気質的特徴として物事に対するこだわりの弱さが推定される（順応性が高く，神経質ではない，規則性が低い）。これらの特徴が，状況や目的に応じて位置関係を調整することを可能にしているのではないかと考えられる。

I児（女児，撮影時間3時間55分）は神経質，規則性，注意の転導性が高く，外向性が低かった（ $|t|(30) \geq 2.79$, $ps < .01$ ）。I児は，他児とヨコの位置関係で手をつないでダンスをしたり，手を引いて遊びに誘ったりするなど，ヨコの位置関係の選好と物理的距離の近さが特徴的であった。また，2人あるいはそれ以上の集団で遊んでいるところに参入する際には他児の間に入り込んでヨコの位

Table 4. 年長児クラスと観察対象者の評定値とt値($df = 30$)

	年長児クラス		H児		I児		J児	
	M	SD	評定値	t値	評定値	t値	評定値	t値
否定的感情反応	2.20	0.57	2.00	-1.96	2.00	-1.96	2.00	-1.96
神経質	2.67	0.44	2.33	-4.19 ***	3.33	8.26 ***	2.67	0.04
順応性の低さ	2.14	0.53	1.67	-4.88 ***	2.00	-1.45	1.67	-4.88 ***
外向性	3.04	0.55	3.00	-0.43	2.67	-3.69 **	2.33	-7.06 ***
規則性	3.09	0.48	2.67	-4.76 ***	3.33	2.79 **	2.67	-4.76 ***
注意の転導性	2.60	0.44	2.67	0.85	3.00	5.01 ***	2.33	-3.43 **

*** $p < .001$, ** $p < .01$

関係を形成する様子が多く観察された。ヨコの位置関係の選好と物理的距離の近さはF児(年中児)と共通の特徴であり、I児とF児に共通する気質的特徴として神経質と規則性の高さがある。同じく年中児であるE児の結果(神経質ではないが、ヨコの位置関係に固執する)とは矛盾するが、神経質傾向の高さが特定の位置関係への選好の強さをもたらしている可能性も考えられる。ただし、ヨコの位置関係の選好が年少児、年中児の特徴であるとする、より年長であるI児がヨコの位置関係を選好した理由は不明である。位置関係の選好と気質的特徴の連関については更なる知見の蓄積が必要である。

J児(男児、撮影時間3時間59分)は順応性の低さ、外向性、規則性、注意の転導性が低かった($|t|(30) \geq 3.43, ps < .01$)。観察においては、1人で動き回りながら他児の遊びに介入する場面が多く見られ、その際にはタテの関係を形成する傾向があった。他児の遊びに興味をもって、途中から参入しようとするため、道具の取り合いになる場面も散見された。他児との関わり自体は少なくないものの、必ずしも他児との情緒的な交流を楽しむというわけではないところに、外向性が低いと評価される原因があるように思われる。また、相互作用が維持されやすいとされるタテの位置関係を形成しながらもトラブルが生じてしまう背景には、順応性が高く注意の転導性が低い(集中力が高い)という気質的特徴からくる、周囲の状況や他児の現在の興味や注意に頓着しない、あるいは気づきにくいという傾向があるのかもしれない。

行動観察と保護者評定についてのまとめ

以上のことから、全体的な傾向としては、幼児の気質的特徴と相互作用場面における位置関係には一定の連関があると言える。以下、各気質的特徴がクラス平均よりも高い、あるいは低い値を示した子どもたちの位置関係の特徴を考察する。

神経質傾向がクラス平均より高い子ども(F児、I児)は、手をつなぐなど、ヨコの位置関係の選好と物理的距離の近さが特徴的であった。一方、神経質傾向がクラス平均より低い子ども(B児、D児、E児、G児、H児)では、ヨコの位置関係の選好がE児には強く、G児には弱く認められたが、その他の子どもにはヨコの位置関係へのこだわりは認められなかった。神経質傾向は刺激変化に敏感であり、周囲の働きかけに対して気を配り、要求に対して従おうとする特性である(武井他、2007)。そのため、安心して活動するためには物理的距離の近いヨコの位置関係を保持しようとする傾向が見られたのではないだろうか。

順応性の低さがクラス平均より低い(つまり、順応性が高い)子ども(C児、G児、H児、J児)は、前述の神経質傾向が低かったG児、H児に加えて、J児にもヨコの位置関係の選好は認められなかった。また、神経質傾向が低いもののヨコの位置関係の選好が認められたE児は順応性の低さがクラス平均より高かった(つまり、順応性が低い)。順応性は見知らぬ人や場所への耐性と考えられ(武井他、2007)、物事に対するこだわりが弱く、その場の状況に応じて位置関係を調整することを可能にしているものと考えられる。ただし、年少児のC児にはヨコの位置関係の選好が認められ、ある程度は年齢(発達段階)の影響も受けているようである。

外向性がクラス平均より低い子ども(E児、I児、J児)では、特定の相手と遊んでいる姿が多く

観察された。また、他児と関わる際にはヨコの位置関係を形成することが多く、特に I 児は誰かと手をつないでいることが多く、自分の横に常に誰かがいるという状態であった。また、J 児は 1 人で目についた遊びをしており、他児と遊びを共有する姿があまり見られず、遊びに介入する際も友達を気に留めている様子は見られなかった。一方、外向性がクラス平均より高い子ども (C 児, G 児) では、位置関係を使い分けながら積極的に他児と交流する姿も見られたが (G 児), 1 人で、もしくは先生との関わりが主であり、他児と遊ぶ姿がほとんど観察されない対象者もいた (C 児)。C 児は先生と 1 対 1 の関係を作ることが多い年少児である。年長になるにつれ徐々に子ども同士で遊ぶようになるという幼児期の友達関係の発達的变化を踏まえると (近藤, 2017), C 児の行動は年少児という発達段階の特徴を反映したものであると考えられる。外向性は活動的であることや好奇心の強さ、社交性の高さを表す特性であり (武井他, 2007), 位置関係のみならず、幼児同士の相互作用の起こりやすさ自体に影響を与えているようである。

注意の転導性が高い対象児 (G 児, I 児) は周囲の音や動きに反応し、注意の方向がそれる様子が、注意の転導性が低い対象児 (D 児, E 児, J 児) では対象となっているものや遊びに集中している様子が観察された。これらはいずれも注意の転導性という気質的特徴と合致する。しかしながら、対象児の観察においては、他児との相互作用場面でタテ、ヨコ、円の位置関係がそれぞれ観察されたが、注意の転導性との対応は高低いずれの場合でも見出せなかった。

なお、規則性は生理的リズム (生活リズム) の安定性に関する気質的特徴であり (武井他, 2007), 規則性が高い対象児 (B 児, F 児, G 児, I 児) では比較的ヨコの位置関係が多く (F 児, I 児), 規則性が低い対象児 (C 児, H 児, J 児) ではタテの位置関係が多い傾向が認められたが (H 児, J 児), 規則性が相互作用場面における位置関係と連関する理由は不明である。

なお、否定的感情反応は保護者評定がクラスの平均値から離れた値を示す対象者が少なかったため (E 児, F 児, G 児), 考察は割愛する。

観察対象児の気質的特徴についての保護者評定と担任教師の評定のずれ

本研究では担任教師にも保護者と同様の質問紙に回答を求めた。両者の評定は大部分において共通していたが、一部で評定値に大きな隔たりが見られた。そこで、対象児の気質的特徴についての評定が保護者と担任教師でずれている場合に、対象児の幼稚園での行動 (位置関係) とどのような対応関係を示すのかを検討した。Table 5-7 は各観察対象児の保護者と担任教師の評定値である。得点範囲が 1-4 であることを踏まえて、保護者と担任教師の評定値の差が 1.5 以上の気質に着目して考察を行う。なお、規則性については前述の通り、主として家庭における生活リズムに関する内容で構成されているため、保護者からの情報がなければ担任教師が回答することは困難であり、年少児においては担任教師からの回答は得られなかった。

年少児 (Table 5) では、保護者評定と担任教師評定にずれのある対象児はいなかった。幼稚園に入園して間もない年少児は、家庭で見せる姿と幼稚園での姿に大きな差異がなかったと言える。

年中児 (Table 6) では、E 児の否定的感情反応と外向性について、担任教師の評定が保護者の評定よりも高かった。観察においては、特定の友達と関わるが多いが、その友達とうまくいかな

Table 5. 年少対象児の保護者と担任教師の評定値

	B児		C児		D児	
	保護者	担任	保護者	担任	保護者	担任
否定的感情反応	2.67	2.67	2.67	3.00	2.33	3.00
神経質	2.33	2.50	2.67	2.00	2.33	2.00
順応性の低さ	2.33	2.33	1.67	3.00	2.33	2.33
外向性	3.00	2.67	3.67	4.00	3.33	3.33
規則性	3.33	—	2.67	—	3.00	—
注意の転導性	2.67	3.00	2.67	3.00	2.00	2.50

Table 6. 年中対象児の保護者と担任教師の評定値

	E児		F児		G児	
	保護者	担任	保護者	担任	保護者	担任
否定的感情反応	2.00	3.67	2.67	2.33	2.67	2.33
神経質	1.33	2.67	3.00	2.33	1.67	2.33
順応性の低さ	2.33	2.67	2.00	2.00	1.67	3.00
外向性	2.00	3.67	3.00	3.00	3.67	3.33
規則性	3.00	3.00	3.67	3.00	3.33	3.00
注意の転導性	2.33	3.00	2.67	3.00	3.33	2.67

Table 7. 年長対象児の保護者と担任教師の評定値

	H児		I児		J児	
	保護者	担任	保護者	担任	保護者	担任
否定的感情反応	2.00	2.33	2.00	2.33	2.00	2.67
神経質	2.33	2.67	3.33	2.67	2.67	2.67
順応性の低さ	1.67	3.33	2.00	2.67	1.67	2.33
外向性	3.00	3.33	2.67	3.33	2.33	4.00
規則性	2.67	4.00	3.33	4.00	2.67	4.00
注意の転導性	2.67	3.00	3.00	2.50	2.33	3.00

かった場合は他児に手を引かれながら遊ぶ姿も見られた。このような、積極的ではないが仲の良い子もおり、他児とも関われる姿が、保護者にとっては外向性の低さ、担任教師にとっては外向性の高さを受け取られたのであろう。その一方で、幼稚園では否定的感情が強いと評定されているが、これは他児との関わる中で、一緒に遊びたいのに遊べない場面等でネガティブ感情をコントロールできない様子が頻繁に観察されているのかもしれない。

年長児 (Table 7) では、H児は順応性の低さ、J児は外向性の評定値が、それぞれ担任教師の方が高かった。

H児については、タテやヨコ、円の位置関係など多様な位置関係で他児と関わる姿が観察されており、順応性が低くないという保護者評定と合致する。一方で、担任教師はH児の順応性は低いと評定している。A幼稚園が自由保育を主としているものの園外保育等の計画された保育も行ってい

ること、自治体や大学の教育・研究の一環として見知らぬ他者が頻繁に出入りする環境にあることから、H児に対して幼児同士の相互作用場面とは別に、幼稚園生活の全般を通して馴染みのない他者や場所、活動に対する順応性の低さを見取っているのかもしれない。

J児は興味・関心のある遊びに対しては積極的に参入していたが、誰かと、というよりも遊びそのものに興味がある様子であった。特定の誰かと、ではない様子から保護者は外向性を低く評価し、誰とでも、という様子から担任教師は外向性を高く評価したものと思われる。

以上のように、観察を通して見られた対象者の行動特徴は、保護者評定と整合性すると思われるものと担任教師評定と整合すると思われるものが混在していた。主として幼稚園での他児や教師との関わり、あるいはイベント的な非日常場面を観察する教師と、主として家庭内での親子あるいはきょうだいとの関わりを観察する保護者では対象児から読み取る情報は異なるために、両者の評定には隔たりが生じることがあるが、必ずしもどちらが正しいというわけではなく、それぞれの場面において子どもたちが見せる姿、あるいはその姿が意味するものに若干の差異が生じているものと考えられる。したがって、対象児、あるいは対象児の行動をより良く理解するためには、両者間での更なる情報の共有が必要であろう。幼稚園で見せる姿と家庭で見せる姿に違いがある場合は、なぜそのような違いが出てくるのかを検討し、理解に努めることで、保育の方向性や支援、声かけの再検討、幼児の実態把握にもつながっていくだろう。

引用文献

- Cook, M. (1970). Experiments on orientation and proxemics. *Human Relation*, 23, 61-76.
- Ellis, S., Rogoff, B., & Cromer, C. C. (1981). Age segregation in children's social interactions. *Developmental Psychology*, 17, 399-407.
- Hartup, W. W. (1992). Peer relations in early and middle childhood. In V. B. V. Hasselt, & M. Hersen (Eds.), *Handbook of social development* (pp.257-281). New York: Plenum Press.
- Hinde, R. A., Titmus, G., Easton, D., & Tamplin, A. (1985). Incidence of "friendship" and behavior toward strong associates versus nonassociates in preschools. *Child Development*, 56, 234-245.
- 神田 まほろ・島 義弘 (2019). 幼児同士の相互作用場面における位置関係の発達的变化—活動の自由度と遊びのタイプに着目して— 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 28, 105-114.
- 近藤 龍彰 (2017). 幼児期における友達関係の発達的变化:やりとりの頻度と相手に着目して 心理学, 38, 25-37.
- Piaget, J. (1923). *Le langage et la pensée chez l'enfant*. Delachaux et Niestlé.
(ピアジェ, J. 大伴 茂 (訳) (1954). ピアジェ臨床児童心理学 I—児童の自己中心性— 同文書院)
- 武井 裕子・寺崎 正治・門田 昌子 (2007). 幼児気質質問紙作成の試み パーソナリティ研究, 16, 80-91.
- 外山 紀子 (1998). 保育園の食事場面における幼児の席とり行動:ヨコに座ると何かいいことある

の？ 発達心理学研究, 9, 209-220.

若林 明雄 (1993). パーソナリティ研究における“人間一状況論争”の動向 心理学研究, 63, 296-312.